

上海万博出演記

日本館パビリオン・イベントステージに、蒲都市文化協会を代表して出演する事が決まり、日中文化交流に少しでも貢献できればと、七月より準備に入りましたが、瞬く間に二ヶ月が経ってしまいました。

次々と上陸する台風を心配しましたが、予定通りに九月十三日十時四十五分上海空港に無事着陸する事が出来ました。喜びと不安と緊張に震える思いで一杯でした。

三泊四日の公演の旅でしたが、駆け足で廻った観光の蘇州は、水路や運河の間に古典庭園が多く、鐘の音で知られる「蘇州夜曲」ゆかりの古刹寒山寺など、絵になる水郷古镇の風情は歴史の中に吸い込まれ時を忘れていました。

二日目、万博会場の下見では、ホールに入らず心配しました。日本館のパビリオン(紫蚕島)は高貴さと未来に向かつて成長する期待感を表わす心という意味を知り、皆で成功を誓い合いました。

三日目、出演当日は、記録的な観客が入場し、四時間待ちで観劇して下さった方々には頭が下がりました。

前夜祭では、上海市長の激

励があり、万博を成功させると約束した事や蒲都市長から頼まれた蒲都市の宣伝も忘れることなく、日本館のテーマ(心の和・技の和)の心もステージを通して伝える事が出来、舞台と客席が一つになった感動は今も鮮明に覚えています。

最終日は、古代庭園「豫園」と上海環球金融中心観光展望台を見学し、バスの中から万博会場を振り返りながら上海空港を経て帰路につきま

した。蒲都市文化協会四十周年の準備に多忙の中、坂部会長、鈴木事務局長も御同行頂きお世話下さいました事、会員一同心より感謝申し上げます、報告とさせていただきます。



(木村君多香)

象万羅森

仏の姿、そして神

平成22年8月18日、NHK教育テレビの日曜美術館は「會津八一と仏目のまなざし」がテーマであった。その内容を紹介しよう。

早稲田大学教授會津八一(一八八一〜一九五六)は美術史家・書家・歌人で、奈良は仏の都であるとして強く心を惹かれていた。

やまとには
かのいかるがの
おほてらに
みほとけたちの
まちていまさむ

八一 歌

八一は実学(単なる知識ではなく実物に触れること)を重んじ、毎年学生たちを奈良に連れて行き、直接、仏像と対面して仏の心を悟らせようとした。学生たちは彼の厳しさを東大寺戒壇堂の広目天(智恵の仏)の鋭いまなざしになぞらえたという。しかし厳しさと同時に常に「生きることの大切さ」を説き、次のように学規(学ぶものの指針)を示してきた。

- 一・深くこの生を愛すべし
- 一・省みて己を知るべし
- 一・学芸を以て性を養うべし
- 一・日々新面目あるべし

ところが、昭和18年11月の奈良研修は学徒出陣の目前であり、一旦戦場に赴けば生きて帰る保証は何一つなかった。生きる事を大切にせよと教えていた八一は心を痛め、十日間で五十の寺を巡り仏の美と心を悟らせようとした。

学生たちは奈良の写真館で心のよりどころとなる仏像の写真を買求めたという。中でも、遙か彼方を切なげなまなざしで見つめる興福寺の阿修羅像や右手をほほに当て微笑み笑みを浮かべる中宮寺の弥勒菩薩像が多かったという。死がよぎる彼らの心の中に母の温もりを見ていたのかも知れない。その後、フィリピン沖で散った若者もあつたという。この年、八一は

けふもまた
いくたりたちてなげきけむ
あじゆらがまゆの
あさきまなざし

と詠った。

さて、私達にとつて仏とは何か。仏と神の違いは何かを答えるのは難しい。いずれも、生から死へたどるさだめの中で様々な暮らしから生まれる願いや祈りが信仰となり、仏や神が姿を現したのだと思うが、私なりに考えてみた。

以前にも書いたが、キリスト教やイスラム教のような一

神教の起源は遊牧民の生活にあるといわれる。絶え間ない移動は常に進路の選択が必要だし、自分たちの利益に反するものはすべて敵として征服して進まなければならない。そのためには強力な指導者(神)の存在が必要で、その指示は絶対服従の掟となる。その教義は人はすべて罪人(つみびと)であり、やがては神が裁きを下さすという厳しい父性に縛られる。結局、神と人との間には超える事の出来ない深淵がある。

仏教のような多神教は森の文明に由来するという。暗い森に漂う神秘感とそれに包まれる一体感が他者を慈しむ心を生み、山川草木悉皆成仏の感覚が身に付くと思う。人は罪人ではなく、愚かな煩惱という苦は背負っていても、やがては仏への道が通ずるという意味で母性的である。出陣学徒たちは弥勒菩薩に母を見たのか、阿修羅像の向こうに浄土を感じたのだろうか。

煩惱の呪縛を断ち切れない凡夫の私が仏の心に触れるにはどうすれば良いのか。いまのところ自分の良心を確かなものにするしかないのだろうと感じた。

(鈴木瑞夫)